091395-000-2

特43-937

三津廼白浪（大汐異聞）上の巻

宇田川　文海／閲

M15

DBN-2300

特43
937

緒言

おゝよそ世の人心の新らしきを愛で古きを厭ひざるは しされど新らしき中ゝ古味あり古き中ゝ新味あるを能く辨知りて之を愛で之れを厭ふもの極て稀あり然ば舊記千年の昔ゝ遡るも新奇驚くべきの談あり目前今日の事を見るも尚陳腐厭ふべきの話おゝあらず故人曰ふ故き温ねて新しきを知ると或ゝ是等の意味より出たる歟此三津迦白波の如き其事たるや四十年前の舊聞ゝ属して然も世の人口ゝ膾炙せる處の大塩後素が事蹟ゝ關係あるも其記くところ專ら山崎將監等六名の履歴ゝして呼謂古

き中より新味あるものよりて珍説奇話尤も人を驚すに足れり然りしかして世人只古をのみ尊ひ新らしきを愛るの常情に泥みて或は之を陳腐おりとし其新奇を辨へざるものあらんを恐る依て字句を校正せるの序聊か此に一言を記して新中古あり古中新あるを辨じ世の看官諸君の別に一隻眼を具して此書を見給ぬんことを編者に代つて請ふあと爾り

明治十五年十二月中浣　　浪華市隱　宇田川文海識

大汐異聞　三津廼白浪

發端

京都比叡山延暦寺一乘止觀院の本朝五岳の第一にて王城の鬼門に當れる艮峰とも號し始め日枝山と書しを桓武天皇の御宇延暦年中傳教大師へ勅命ありて帝都鎮護として根本中堂を建營したまふより比叡山と改めし事の世に言ひふるしたる事にて今更詳かに記すを待ず此山一年の行事種々ある其中に例年四月八日に花摘といふ會式ありて東阪本の花摘の社に花堂を作り小かなる釋迦の銅像を安置し諸人の參詣を許す此山の清規にて女人の常に登山するを得ず然に今日のみ其禁を解て女人の登山を許せば參詣人殊に夥多し此社の傳教大師の母堂妙德婦人を祭る處にて則ち婦人存生の時大師に御對面の爲此處迄登山仕給ひしとか今日女人の參詣を免さの蓋此遺意なりとぞ聞話

休題今は昔文政九年四月八日の事今日なん例年の花摘なれば洛中洛外の貴賤老若の更なり近國近在よりも數万の參詣人群集し名におふ比叡の御山も滿山人ならざる處なきまでの雜沓なるが中にも一二の阪邊の就中乃賑ひにて往來乃人さながら織るが如しかゝる處へ群來る人を右に避け左に除けつゝ御山を下り來る二人の婦人あり一人の年齢三十あまり其裝束の鼠紋附の小袖に黒繻子に金糸にて縫をなしたる帶をやの字に結び額に黛を畫きたる公家に奉仕する女と思へれ一人の年齢十五六友仙の振袖に織物の帶を文庫に結下たる町方乃娘と見ゆ年長たる路邊に亂開れたる晩櫻も羞らひ年若きの岩間に綻初めし杜鵑花と松枝にさきかゝりたる藤花も色を失ふばかり孰れ劣らぬ美人なれば行違ふ人々老たるの目を注め若きの心を動し誰とてその美麗きに跡かぬ者もなし折しも麓の方より上り來る二人の武夫あり二人とも多く

酒を過せしにや顔い腰刀の朱鞘と色を爭ふばかり石徑を千鳥に歩み互に轉倒パじと手を引合て來掛りしが向ふより來る二人乃女乃容色に目を附て一人の武士石に躓きてひよろつく拍子故と先に進みし年長し女乃襟首にしがみつき「ドッコイ危い女中御免と」そのまゝしなだれかゝるを女い物をも謂ず其武士の手を執て引放そよと見ねたりしが如何なしけん武士い傍に堂と放附られ石に額を摺剝きつ刀さへ鞘走りけれパ參詣乃群集雖笑ふともなくドット計りに聲を揚げゝる彼武士い漸く起上り鞘走りし刀を手に取りしが此場の樣子に耻らひてや顔いいよ〳〵赤を添へ「己れ腐れ女め武士に手向ひなそとい、癪不敵手打に致そぞ覺悟いたせと女に向つて切てかゝ、を女い少も畏る、色なくスックと立て不動体に身を固め何か口中に唱ふるよと見しが其武士い刀を持しま、立そぐみに成り後へにハタと返倒たり後に扣へたる武士も此体を見て同く刀を引拔しが是も惣身の麻痹る体にて女の傍へも近寄る事ならず迚も叶いじとや思ひけん二人とも刀を提しま、群集の中へ紛入りいづくともなく逃去けり參詣の群集は女の働きを見て口〳〵に賞嘆と其中に此女を知る者ありて渠い當時八阪に住居して其名を遠近に聽と豐田貢の門人菊江といふ女なり渠なれば稲荷明神の附てゐまと故彼位乃事い普通の事何と稲荷樣の神通は世にありがたき事ならずやなどいふ者もあり此て菊江は逃行く武士をば見もやらず徐に後ろを返顧れば伴ひ來りし娘の在らざるにぞコハ何地行にけん不審しやと群集に向ひてその行方を尋る處へ傍の櫻の木蔭より「雪ならば幾度袖をと口吟み散かゝる花を道服の袖にうけつ、徐々出來る一人の武士女に向ひて横柄に「女中只今の働き感服々々さりながら娘の行方い分るまじ既に先刻吾等の伴人をして和主の宿許へ送りやりたれば安心して歸られよといふ其風体編笠眞深に冠りて其容貌い定かならねど鼠綸子の小袖に茶緞子乃法眼袴を着黄金造り乃大小を佩たる如何にも由ある人と見虚言を攜へて人を愚弄ぶやうにい思はれねばゝ、心を安んずるもれ、是迄つひに見し事もなく人の宿處を知りて娘を送りくれしといふが如何にも不審ければ「是迄御意得し事もなき卿樣がと半言いせず武士は「其不審い尤ながら孰れ近日和主の宅を尋ね吾等の住所姓名且い和主を見知りをる由縁を詳く説てその疑を晴さべければ今日は姑く吾等が言を信じて疾くしゝ宿處へ歸るべしさらばと計言捨て散しく花を蹈去ださ道なき道を山深く後をも見ずしてたゞり行く跡見送りて彼女い何か心に打案じ群集の人と諸共に麓を指てゞ下りける

第一回

うちひさと都の町の川東つゑたらぬ八坂上る町に門の構へ玄關の造りいとものくしく家居ひろやかに住居なと陰陽師ありて主人い名を豐田貢と呼て年齢よゆるぎの五十をまとかゝみ二つ三つも越ねたらんとおぼしく鼻高く眼尖く物冷き中に愛敬ありて凡物ならぬ老女なり常に白衣を附け緋の袴を穿ち手に檜扇を持ち潛上なる身の粧ひを爲そのみか家の周圍も小簾掛渡してやんごとなき方樣の住居の風を摸擬せり稲荷の大神を祭るといふは表向さのみ其内實は天主教を奉じて私に天帝を祭り陰陽卜筮加持祈禱に附托て愚夫愚婦を惑いし多くの金錢を掠て之を蓄積はへ此世を吾世と得意さけり今日も多くの參詣人先を爭ひ運氣緣談失物疾病など各自異樣の願ひを言て玄關に詰掛るをば一々之を稲荷則天帝を祭るの一間へ集内し頓て例刻に成しかば貢い例の衣服を整へ門人菊江といふ女を從へて徐々立出上段の間なる神前に設けたる敷蓙の上に坐を占て人々の願ひに應じ占考祈

禮夫〻に致し居しが事や、酣なる頃取次の小女出來り只今知恩院門前の易者山崎將監(八十)といふ立派なる御浪人が見えられ御面會を願ふとの事なるが如何取計ふべくやといふ貢い之を聞て菊江に向ひ「山崎將監とい過日其方が比叡の花摘に參詣の途中狼藉者に山逢て難義の節伴ひし娘おさとを介抱し家來を以て吾家まで送屆けられし其人なり其折彼家來某の口上にて其姓名を聞知れりされば其方い更なり妾も一應面會して過日の謝禮を述たければ離亭にお通し申し御茶にても參らせよ神事の終り次第妾もまゐるべければといふ其指令に從ひて菊江は將監を離亭に案內し茶に菓子に懇に饗應しつゝ過日の恩惠を云々と謝する處へ參詣の人々を返して貢も出來り爰に始て將監の風裁を見るに年齡三十七八眼光人を射て一餅なるべき面魂尋常一樣の人物ならねばや、叮嚀なる言を用ゐ菊江おさとが介抱に預りたる過日の禮を述れば山崎は莞爾と笑ひ元來同宗同門の交際なれば彼式の事いおろかスハといふ時にはといひつゝ家の四隅庭の四方に眼を配り隨分お力に成る所存と肩怒して言出れば貢い心に不審い抱けど故とさならぬ面色にて弟子共がお世話に成し貴殿のお礼殊に承れば易術を以て門戶を張らるゝ由なれば俗にいふ同業の交際此後御懇親を希ふいもとよりながら同宗同門とは其意を得ずといふを打消膝を進めおとぼけなるな貢毀過日御門入菊江どのとやらが二人の醉狂人を挫ぎし時不動体に身を固めて口に呪文を唱へたる其呪文い定て何々の經典ならんさそれば同宗同門に紛れなし如何に某の言に相違なりやと言尖く言放され流石の貢も吃驚として「吾宗秘密の其陀羅尼を貴殿い誰よりお傳へなりし「イヤ某よりさいふ和御前はソモ何人より授りしぞ「イヤ妾より貴殿お「イヤ某より和御前お「イヤ妾より「イヤ某よりと互に膝を

突合暫時睨ねたりけり

偖も貢は將監に吾宗門の秘法を言當られ一時驚愕の餘り其場を去らせず切害せんと思しが又よく〳〵思ひ返せば吾宗門秘法の陀羅尼を諳んずるからはよもや公儀の探偵吏ものにもなるまじ然は何處の誰に從ふて此秘法を學びしやさりとては心憎し尙能く渠が心腹を探りて愈々同宗門の者なれば吾味方に率入て後來事を擧るの日の股肱羽翼にせんものと流石の老練家なれば早くも心算を改め酒肴を出して夜に入る迄厚く持成し尙も詞を和げつゝ妾が秘法傳授の由來又身の素上をも元より御明し申そべけれど且貴殿より說明して妾が疑念を晴してよと懇に賴聞ゆれば將監は呵々と笑ひ然ば某より打出して和御前の悪念を散そべしと言ひつゝ四邊を見廻してソモ某の先祖といふい豐臣家恩顧の大名某の家臣なるが大阪落城の後尙も去らぬくも豐臣家に恩ひ報ひ德川家に仇せ

んものと天草の一揆に同意し島原の城に籠し者某も先祖の遺意を繼續ぎ機會を覬覦ひて德川家を倒さん存念さりながら浪人の痩腕を以て時の將軍に敵する事故迚も正道を以て勝を得の目的なけれゞ是れも天草一揆の遺族なる清水軍記に聽ふて天主教の秘法を傳習び卒といふ時戰爭の用に當ん豫ての志定めて和御前も同く清水の門人ならん包瞞す某に語りたまへと言れて貢ハホット一息サテハ貴殿にも軍記殿の御門人とやお察しの如く妾も彼人の弟子にて侍り左それゞ疑ひもなき同宗同門只夫のみならず妾も亦豐臣家の遺臣なれゞ師匠軍記殿と心を合せ一回討幕の旗揚して祖先の志を成んと豫ての志願然るに不幸にも軍記殿に死別れ何をいふにも女の手一つ心ハ矢竹に早れども何彼につけて思ふに任せず斯てハ多年の宿志を果さに由なく空く泉下の鬼になるおとかと是なる菊江も只二人朝夕遺恨の涙を飲込みつゝ無聊と月日を送りをりしが今日圖らずも貴殿に邂逅ひしハ全く造化主の冥助且ハ祖先と師匠が靈魂の引承未だ妾が運命の盡ざる證と菊江と二人顏見合せ天に向ひて合掌しアーメン〳〵と異口同音にぞ唱へける將監ハ二人の樣子を見ていと心地好げに互に同宗同門の交際ある夫計か三人が三人ながら先祖も同じ豐臣家の遺族といふハ世にも稀なる不測の際會今宵は此處にお宿を希ひ先祖以來の家の頗末此身の履歷有葉有枝話しつ聞つ語明さん此く心の解合ふからは何時迄堅ふ成つてゐるも無益の至と袴脱却丈六組み迚も頂戴いたそなら大きな物をといふを聞くより菊江は立て五合入の大盃を持出せばヲヽあれ〳〵と引受てなみ〳〵酌せてぐつと一引き貢も袴を脱却つ行儀崩して盃取上げ祝ふて妾も一献と主も客も打解て酒宴に時を移せしがやゝありて貢ハ小膝を進めさらば妾より家の系圖と妾の履歷を詳に御語り仕らんと膝立直を折しもあれ一村雨の蜜然と降いでゝ昔を忍ぶ妻なりと昔人のかおたれし軒の橘の追風しるくさと薫り時鳥の初音さへ一聲ほのかに聞ねけり

第二回

附言是より以下貢將監菊江三人が素生の昔語なり看官その心して讀給へ

世の中をう月の空に郭公そぎにしかたを忍音になく

却説抑此豐田貢の素生を尋るに先祖ハ慶長五年七月關ヶ原一亂の前石田三成の密旨を受け參州池鯉鮒の驛に於て水野和泉守と堀尾帶刀先生とを刺んとして命を其場に落したる美濃國加賀井の城主加賀井彌八郎（因云舊記を按ずるに酒宴の席上彌八郎不意に起て和泉守を切殺し次て帶刀先生をも討んとせしが却て帶刀先生に討れたりと云）の家臣にて豐田勘兵衛といふ者なり主家没落の後舊主の志を達せんものと大阪の城に入城せしが落城の後主家の舊領美濃國安八郡に引籠り農民の群に入けりされども尚舊主の遺恨忘兼をりもあらば德川家に仇せんものと私に其時を待し甲斐もなく遂に其志を遂ずして空く亡者乃數に入りしが其子孫代々未粗を執て畎畝に耕すも絶ず先祖勘兵衛の殘念を繼續て倒幕の志少も撓まざりし貢ハ家乃不幸に當りて幼年より京都祇園町乃亡八某の許に賣れ十六の時初て賓客の宴席にいでしが才色両ら衆に優れたれば間もなく大藩の君の其一人にぞ數へられける偖も貢が如何にして天主教を奉せしといふに其頃あるやんごとなき方樣の次男にて武家の王家を輕侮にそるを憤る不平のあまり那の業平朝臣の風を學びて常に花柳の街に放浪ひ世に好色家の名を博りて故と其光を韜晦み遊興に假托て諸藩の浪士の中にて一拔群ある者且ハ尊王の志ある者を撰て密に交りを結び暗に倒幕の計策を回そ字を蓋の君と呼ぶ人あり貢も女にあそばれ先祖の遺

恨を常に心に忘れずかく浮萍のよるべ定めぬ身となりしを不幸中の僥倖にしてゐれゐらゆる世乃愛傑と契を交し倒幕の挙を企立んものと豫て心に占めをりしかば何日しか此蓋の君と理なき中と成り爲に浮名を立られて世の客人の愛顧の日に〳〵薄くなるをも更にものゝかずともせず只管彼君と親睦みをりしが頃來如何なる故にや彼君のふつに通路を絶ちければいろ見ゐでと昔の人の嘆息し如く人の心の花のうつろひ易く他に増花を親たまひしかさらずば御所勢にもや或い又何か障碍る事の出來たまひしかと信田の森乃楠の木の千枝にわかれて物思へども雲上地下の隔絶ゐる故文して起居を伺ふまともならねば獨り心を惱まそのみ果い賓客の招きをも謝りて下屋籠りに日を送りぬ爰に又其頃卜筮を業とし傍ら手品を以て世を渡る清水軍記といふ者ゐり其業を以て公家武家へ出入そるい更なり時々祇園町にも入來り遊興かたゝ懇娼妓の望に應じ卜筮又い手品などそる事ゐるが卜筮は百占百中吾邦の指の巫も只ならず手品い變幻百出唐土の左慈も三舎を避るばかりなれば其名いと喧嘩し貢い一日不圖此人の事を思出一回招きて彼君の身上を占ふて貰いゝやと使を清水の許につかいせしに軍記い幸ひ家にゐりてその使ひと共に時をも移さず出來りぬ

偖も貢い清水軍記の來るを待て自己が部家へ招入れ蘇の君の云々を語りて身の上の占考を賴みしに軍記い此と聞て莞爾と笑ひ夫なれば占考をそる迄もなし吾等彼君とは別懇の交際なるが君には頃來勅命を以て本家乃相續を仰附られ御一門内なる某家の姫君露姫といふ美人と縁談を取結ばれて然も今宵は婚姻の當日なりされば是迄の如き部家住の御身分とは事變り官位両ら増進それば最早此後花街の遨遊などさる輕率き事いゐるまじ卿彼君と如何なる契を交し給ひしかは知ねど今迄の事い夢と諦め速に斷念たまへと懇ろに説諭そを聞より貢は柳眉を逆立末の松山波あさじと彼程堅く契りながら只一言の答もなく他より嫁君を迎へたまふとい世にも聞ゐぬ成されかた今一度那君の御顔を拜し平生の怨の述たきに先生の妙術を以て彼君を招くかさもなくば妾を彼君の許へ誘ひてよと只管賴みて止ざれば軍記もさあそと不便に思ひ夫程迄に思ふからい吾等術を施と迄もなく今より卿を那君の許へ誘ひ參らせんさりながら先方い今更いふ迄もなき高位貴人卿い下賤の者なれば只他ながら御顔を拜そるのみ物言ふ事乃適いねど夫得心にて思ひを晴さるゝやと言ふに貢いヤ、暫時思案にくれて居たりしが假令言い替されずとも責て御顔なと見なば些少い思ひ乃晴るける事もやと思ければ頓て承諾して夫にても苦しからねば是非に誘ひ給へと言出けるを軍記い聞て打合點ささらば支度を整へ給へと鬢乃紛亂を理し紅粉を粧いせ衣裝も曩着を被飾せつゝ其日の夕方より亡人が許を連出し道を北に取て幾町か歩ひと思へば門乃搆もいと立派なる一軒の公家屋敷乃前に至れり軍記い門前に足を止めて貢に向ひ卿ブ情人董の君の邸は則是なり是より奥殿へ案内それば如何なる事乃目に觸れ耳に聞ふるとも必ず疎相乃なき樣にと懇に念を推し頓て潜門より入て内玄關に連行き案内を乞ば一人の青侍立出で來意を尋ね他ならぬ先生乃事なれば御婚姻の儀式拜見の義い苦しからず申と迄もなき事ながら御聊爾なさやう卒お連の女中と共々此方へお通り候へと先に立て案内そる迹に隨ひて貢い畏る〳〵奥殿深く歩みしが間毎々々に銀燭を燃し連ね其輪奐乃美麗なる床の間の飾り襖障子の造へ総て有職の好みにて是迄見し事もなき体裁なれば此處なん噂に聞及ぶ禁裏にやと流石の貢も心に疑惑を抱き踏る壘に足の附ぬ心地して倘幾

間か通過ぎしに遙か彼方なる廣座敷に數十の花燭を點連ね管絃の音笑語の聲いと喧嘩しく聞ゆるにぞ彼處はそ儀式の間ならめと漫に歩を疾めて至見れば果して彼君には嚴重なる衣冠して嫁君と對坐したまひけりスハヤと心動めきて且嫁君の粧色に目を注めて見ていれば緋の袴に紋繻子の袿を被り綠の黒髪を結垂れ給ふ姿艶たけ匂ひいりてその美麗さ得もいはれず那君と實に一對の好配偶彼方に梅の匂ひいれば此方に櫻の媚いりて雛の夫婦にさも似たればその嫉妬さ限りなく胸の炎の燃立て吾から押ふる術なければ軍記が傳ての訓誡もいつか忘れて夢幻薄情男奴覺悟せよといふより早く身を跳せアナヤと軍記が牽止る袂を丁と振切て一間へ飛込そのまゝに萱の君の襟首をぐつと掴みてワットばかり一聲高く泣入鬼

第三回

松の嵐も音寒て霜に玄もをく冬の夜の月の色さへも

のそこさ祇園社の境内なる御手洗所の片邊より御燈火の火の細々と落葉が上を照そなる石燈籠の片蔭に悄然佇立一人の女年の齢い十八九藝妓と見て容色も最艶麗たる美人なるが左手に持たる鏡の面にいのり〳〵寫る吾影を吾と見詰てホット一息「ハテ不思議や今迄いのりたる奥殿い俄に變る祇園社管絃の調笑語の聲と聞しい松吹く風萱の君と露姫と見しい鏡に寫る吾影是ぞ正しく軍記様が例の幻術でいのりつるかと四邊見廻そ後の方に儼然と立たる清水軍記「如何に貢殿萱の君と露姫の御婚姻を垣間見て些少心の晴れ候やサテも恐ろしき嫉妬心かなと聲掛られて貢は吃驚思いず持たる鏡を落せば石に當りて鏘然たり（因にいふ貢が持たる鏡い家を出る時軍記が所持せよといふに任せて携へたる物なり）此の後貢は人を以て萱の君の様子を探らせしに軍記の言に違いず本家を相續して露姫と婚姻を結び今い容易く花柳の

街衢に足を入るべき身ならねば今い是迄の因縁と漸くに斷念しが元來心逞しき女なれば爰に熟々思案を廻らし此く迄幻術に長たる軍記なればよも凡物にいるまじ色に托せて無二の交際を爲し一つにい渠が幻術を學び一つにい渠を臨機の時の用に立んものと私に心を定めしかば其後尚も占考に托せて清水を吾部家に度〻招き果い程好く言寄て水漏らさじの契を結びつ互に心の底を打明しが孰も豐臣家の遺臣にして德川氏に怨を抱く者なれば一入想思の彌増り軍記も貢が請ふに任せて天主教の門弟と爲し宗門の秘事密法奥をつくして盡く之を授け夫婦の如く交ひけり偖も貢い其後軍記と言合せいつまで花街に彷徨ひをらんより一回いやんごとなき方様の奉仕をして雲の上の有様をも覗ひ武家に不平を抱く公家を密に語ひて豫ての望の足にせばやと豫て畜へたる黄金もて己が身を償ひ大内の婢女に住込爰に四年五年を送りやがて今度い八阪に居を構へて稲荷の神を奇貨に使ひ卜筮祈禱の業を營みて愚夫愚婦を惑いし軍用金の貯蓄に從事せしが未だ望を達せる時を得ざる間に軍記に死別れ其後い然るべき味方を得ざれば徒に心を傷るのみまた詮術もいら玉の年を空く重つゝ彼の蚊龍の地に蟄れ時の至るを待つ想ひ空く月日を過し鬼

是より以下い山崎將監の素生を記せば看官請ふその心して讀給へ

却説山崎將監の先祖を山崎義夫と云ふ義夫は紀州新宮の城主堀内安房守氏善の家臣なり主人氏善い豐臣殿下の厚恩を受け石田三成とい無二の交際なるを以て關ヶ原一戦の際三成に左袒して新宮の城に立籠關東勢船に乘て南海を廻らば遮斷んものと飽迄軍備をつくしたる其甲斐もなく一艘の敵船をも見ざる間に關ヶ原の戰爭三成脆くも敗を取りしかば氏善大ひに落胆し此の上い何日迄かゝる小城に立籠て關東

の大軍を引受け空しく爰に一命を棄んよりハ一旦此城を開きて大坂に赴き秀頼公の馬前に於て關東勢を驅破

り花〳〵しく戰死を遂ばやと豫て城中に蓄積たる金錢兵糧を取出し家臣の老幼婦女を始め傾分の百姓に壹く分與へ屈强の兵士のみ三百餘名を引卒し大阪指て押出せしが田邊和歌山及び各處にて關東勢に遮斷られ度々の合戰に多の兵士を打せ今ハ主從殘少なに成りしにゞ此勢にてハ迚も大阪へ入城せん事覺束なければ何處の浦にも身を潛め時節の到るを待つべけれと主從各自に姿を化し何處ともなく落失けり爰に又將監の先祖山崎義夫は吉川庄太夫井上權右衛門金原次郎同三郎堀藤次郎土井又三郎久保秀太夫の七人の人々と一方の血路を切開き万死の中に一生を得しが肝心なる主人氏善に別れければ主の先途を見失ひて何日まで阿容々々存生ふべき事此處に於て刺違へ主人へ不忠の辨解せんと道の芝生に坐を占て鎧の上帶を解んとそるを其中の一人にて第一老年なる吉川庄太夫ハ咄嗟と計り七人を推止め生ハ難く死ハ

易しとやら死るのみを武士の意地といふべきかハ迚も死ぬる命ならば此處に於て無作々々割腹せんより今少時く餘命を保ちて尙主人の生死を尋ね傍ら時世の變動をも覗ひつ若大阪に事ならば其時入城して主人の志を成し快く戰死を遂るゝそ好れ幸ひ此紀州と泉州の境界牛滝山の背後七越峠三國ヶ嶽の邊り鬼谷の奥槇尾山獅王ヶ嶽の後に續き八嶽四嶽四十八瀧三十六嶺とて護摩嶺佛具嶺馬頭嶺不動嶺などいふ大きなる洞穴ハり何れの嶺も洞内廣濶にて何世に誰が工みなせるか窓ハり扉ハり水の手にも乏しからず自らなる城郭を做して世を忍ぶにハ屈竟の場所前年此邊の地理を探る事を主人に命せられし際密に見置て不時の用に立んと豫てより思占ねたり今より彼處に至りて鋭氣を養ひ時の至るを待つべしと道理をつくして諭しけるが元來吉川の智謀をば常に尊信してゐる人々のゝとなれば義夫を始め誰とて否やを

云ふ者なく一同然るべしと其議に隨ひ直に道を轉じて道なき山中を潛行り頓て那の三十六窟に至りて爰に居を占め夜な〳〵近郷近在に出て、豪家又は寺院などに亂入し衣食米錢を掠奪ひ之を日常の用に充て心安く月日を送居り其間に甲乙となく身を化して堺大阪京等の各地を徘徊し關東大阪の模樣を覗ひ主人氏善の安否を尋ね兼てゝ關ヶ原一戰の落武者を語ひて密に誘歸り終にゝ百餘名の人數に及びしが慶長十五年大阪の役に八名の人々百餘名の人數を引卒して大阪の城に入り元和元年夏五月大阪落城のそのみぎり金原三郎一人のみ戰死を遂げ殘る七名ゝ幸ひに潮手も負ざれば討漏されの兵卒十餘人を瞞へて又も一方を切開き再度元の岩窟に返り其後天草の一亂にも出張して嶋原落城の節天主教の教師毛利宗意軒の高弟清水軍兵衛といふ者を誘ひて岩窟に連歸りぬ其後此軍兵衛に就て七人の人々盡く天主教の秘法を悉び此秘法を弘るを名として諸國を遍歴し密かに同志を語らひて多くの徒黨を岩窟に招き後には七人の人々各自國酢より妻子眷族を連來りしかゞ子孫次第に繁殖し七名の血統今に連綿たり則ち吉川庄太夫の末孫龍太郎岩窟の大將と成り將監其餘五名の人々各之れが副將と成り清水軍兵衛の末孫軍記が家傳の天主教に深く通じたるを以つて之れを軍師と仰ぎ三百餘名の手下を指揮し山賊を働らきて世を專恣に暮しけり

爰に又菊江の履歴を尋るに菊江の先祖は慶長の昔三河國に於て三万石を領せる原隱岐守勝胤の家臣安田新次郎と云ふ者なり主人勝胤關ヶ原の役に石田に加擔し戰敗るゝの際關東勢に擒にされ京都二條河原に於て果敢なく梟首の刑に所せらる新次郎ゝ關ヶ原敗軍の日一方を切拔て危き命を保ちしが元來忠心無二の武士なれば德川父子の中孰なりとも一太刀恨み

て亡君の殘念を晴さんものと豫て習覺ねしを幸ひ皷の花形の職人に身を化して德川家に事へ機もあらばと只管其透を窺ひしが單身を以て時の將軍に刃向ふ事なれば世の喩にいふ螳螂の斧迚も志の成るべくも思はれねば遺憾ながら遂に復讐の念を斷ち空く老死を遂にけり其子孫の中にて同職を以て彦根藩に奉仕せしものありしが其後故ありて浪人なし江州の大津に住居して町人の群に入り塗職を以て世を送りをり菊江ゝ則其家に生れしなり然るに菊江の父某ゝ多病にして職に就く事能はず夫が爲菊江ゝ十五歳の時同所芝屋町より藝妓に出されしが出ると間もなく同國八幡の糸商人某に根引され某ゝ京都に取引あるを以て妾宅を同地に携へ其處に吾身を入置れ何不自由なく暮しをりしが其後數年を經ざるに不幸にも某に死別れ是より先父母にも先立れて今ゝ木より落たる猿猴にひとしく世にも便り少き身となりしかば心細さの限りなく一日身の行末を占はんと當時世に其名聞ありたる八阪の貢の許に至りしが是ぞ緣しの初めにて漸次に懇なる中となり果は貢の辨舌に說附けられ且ゝ元來先祖の素生を傳聞して暗に德川家の繁昌を心に快しとせざりしかば遂に貢に一味して天主教の門人と成りしに心遲く才賢さ女子なれば貢も二なき者に思ひやがて己が養女となし菊江も亦貢の器量に感じて猶生母の如く敬侍さけり（以上三人の素生談終り以下第二回貢が宅にて三人對話の處に返りて筆を執ば看官其心して讀給ハん事を新る）却說貢將監菊江の三人ゝ各自先祖の由來其身の素生を明し合ば孰も豐臣家に舊恩あり德川家に遺恨あるのみか同じ天主教の信徒なれば其喜び斜ならず猶も酒汲交して互に赤心を吐露し慷慨悲憤に堪ざりしが頓て貢は手に持たる盃を將監に勸め菊江を顧て片頬に笑を含みつゝ最卒爾なる申言ながら將

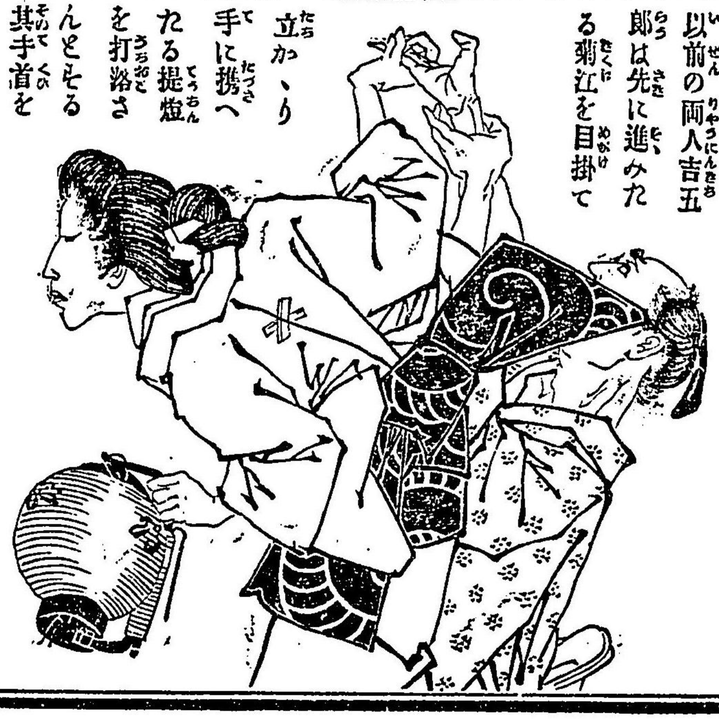
監殿には未定まる内室もおわさぬ由如何に是なる菊江を御娶り下されずや貴殿も菊江も共に大望を抱けば迚も常人の婿嫁には成難き身上さればとて四十に未間のある同士なれば獨身にてもをらるまじ古より英雄と呼れ豪傑と稱へらるゝ者色の爲に望を失ひ事を過つまと往ふある習ひなれば老女の過慮は此一つなり今老女が言に隨ひて此婚姻を許されなば夫まそ合たり適ふたり世の喩に云鬼に鉄棒此後事を擧る時互に力を援け合ば万に一つも過失あらじされば是ど眞に万全の計畧ならんと辨に任せて說付れば將監も實にもと諾ひ菊江ゝ固より異存なければ即坐に談話の調ひて貢が取出せる土器の土になる迄攀らじと二人ゝ交せる三〻九度重〻の目出度さに老女が一さし舞はべらん高年してと笑ひそといひつゝ貢ゝ立上り手に携へし檜扇をかざして壓も高砂やそれにゝあらで羅城門「ともなひ語ふもろ人にみきを勸めて盃のとり〳〵なれやあづさ弓矢竹心の一つなると舞ば此方の將監も扇取上膝拍子思ふ心のそまいなく只打解てつれ〳〵と降り〳〵らしたる宵の雨是ど雨夜の物語り謠のまゝの景況にてその夜ゝ酒に明しけ

第四回

爰に又其頃大坂の町與力に弓削新左衛門と云ふ者あり生質便佞利口にして然も邪欲逞ましく能く上に媚び飽まで下を虐げゝれば人〻之れを忌懼るゝまと蝎蛇疫神も只ならず此の新左衛門新町なる八百新と云ふ長吏の娘さくといふ妾とさくの父八百新を始め千日なる塀の内の吉五郎蔦田儀助など名うての長吏三名を武士の形容に出立せて供に連れ京都比叡山の花摘の法會に參詣なし山の半腹の茶店に坐を搆へつゝ名物の田樂を下物に取寄せ用意の割籠行厨を開き妾のさくと八百新を相手に酒酌交してゐる處へ吉五郎儀助の両人の者飲たる酒は何處へやら色青醒て歸り來り新左衛門と八百新に向ひて面目なげに「旦那誠に遺憾しくつて成ません兄貴も聞て下だせへ實ゝ此う云ふ譯さ一杯頂戴仕た微醉機嫌山中の景色を見物せうと多勢の群集を掻分けて一二の坂乃下迄行くと向ふから下山してくる二人の女一人は三十恰好乃年増一人は十六七の新造双方も目を驚かす美人故一寸と愚弄て當坐の遊興と故と酒の醉に紛らして且吉五郎が年増に抱附くと手もなく其處へ犬子投げコハ遺憾しと両人が驚嚇の一刀引抜て女に向へバァラ不思議や惣身麻痹て吾知す背後へドッサリ岩角にて尻をした、か美艶い顏に似合ぬ非常の勁さ女と侮り二人共刀の鞘の赤愧をかくの仕合面目なさに群集に紛れて狐鼠々々と漸く逃て歸りしが大の男が然も二人女に負た此腹立情願旦那の御威光にて嗚して下され願ひ升と頭掻さ〳〵云ふ顏を新左衛門ゝ熟々見て呵々と打笑ひ「貴様達ゝ狐にでも魅まれたか馬鹿を云ふにも程のある相人は柔弱き女といふに手も動さず投られたの立向へば惣身が麻痹れたのと如何に處が叡山なればとて白晝乃此群集にマサカ天狗が出歩きも致そまじ然し弓削新左衛門の長吏が女の爲に投られたといふ事が後日世間に知れてゝ武士の一分に係ゝり且ゝ役目の名折なれバ其女の身分を糺し時宜に依てゝ貴様達の意恨を晴してもやりたけれど今日ゝ遊山の途中といひ殊に相人を見失ふたとゐるからゝ今といふては詮術なし然し此儘止むべきならねば其方達二人ゝ尙も當地に止りて彼女の所在を探り若怪さ事もあらば早速吾方に知そべし例の疎忽を働さて再度の不覺を取ぬやう能く氣を附けよと言含め「詰らぬ話を聞たので折角の興が醒た今から祇園町へ行て飲直さん孰も來やれとおさくの手を執三人を跟に悠々と山をば西へ下りける「池の蛙の壁幽に聞ゆ雛の卵の花の色はのかなる夕月夜爰ゝ八阪なる豊田貢が

家の門前に佇立私語ふ二人の男過日叡山の花摘の際辛いめに逢せ居つた年増の家ゝ確に此處ぞと目的を附け忍で樣子を窺へば恰好幸ひ彼年増め客を送つて出て來る鹽梅程好い處に埋伏して不意に起て意趣返し儀助ぬかるな吉五郎和主も確乎ヲ、承知と二人ゝ傍の物蔭に身を潜して居たりけり

此る處へ山崎將監菊江が挙し提燈に足元照させ蹌々と昨夜からして今日一日飲暮したる酒機嫌「蓋の葉の笛を吹き波の皷をドウト打ちと小謠を唄ひながら出來り菊江に向ひて腰を屈め「昨夜より種々御饗應に預り千万忝けなし最早此先ゝお送りに及ばずお提燈丈拜借いたさん万望御北堂へ宜敷お禮をと流石名に負ふ武夫の心の情愛言ばゐに謂で無情さ別れの詞菊江ゝ女子の吾夫と昨夜定めし今宵のさぬ〳〵明日ゝ逢ふ身と思へどもそゞろ名殘の惜まれて切て宿迄送り度き心の底の穏にいでゝ手に携へし提燈の光照り添ふ顔の色「餘程御酩酊の御樣子お足元も危なければ切て垣道の處までと將監の手をじつと執り二歩三歩歩く間もなく道の行手の物蔭より突然と出たる以前の両人吉五郎は先に進めたる菊江を目掛て立かゝり手に携へたる提燈を打落さんとそる其手首を



菊江ゝ掴ひでグット捻上げ此方を見返る其時早しこれと言樣打てかゝる儀助の右手を引かつぎドッサ

投たる將監と顔見合せて互に茫然

「月に叢雲「花に風「世にゝ邪魔なる「奴もあるものと云ふを途炭に擡起そ清水寺の鐘鎬々と五つの時をぞ知せける」華頂山智恩教院の門前にさまで手廣といふにもあらねど玄關擇へを爲したる一軒の家居の門に掛たる招牌に乾坤の封を書き下に周易の二字と不息堂の三字を大書したるゝ是なん前回に掲出せし山崎將監の家居なり早朝より判斷を請客人絶間なかりしが漸く退散し玄關に履屐の一足も見ゑずなりし處へ年齢五十ばかりの老婆が十四五なる容貌美麗しき娘の手を執り悄々として出來り恐縮ながら玄關に音信つ、取次の書生に向ひ慇懃に「私共母子は攝州の者此京都に尋る人の有て遙々出て參り二十日計り前から彼處此處尋ね升れど今に於て行方知れず此方の先生樣は占考のお上手と承り故々願ひに參じました情願尋る人の生死存亡と居り升る方角をお知せ下さる樣先生樣へ宜敷お取次を願升そと言

ば書生ゝ打合點暫時お待なされと言捨てそのまゝ立去しがやがて又出來卒此方へと先に立二人を誘引

ふ奥の一室其体裁を見渡せば八畳敷の坐敷一面舶來の毛氈を敷連ね床には宋の邵康節が龍起而呼雨の一句を書たる軸を掛け前には古銅の花瓶に白牡丹を活け明かり窓の下に紫檀の唐机を置きてその上には一卷の周易と算木筮竹青磁の香爐に一炷の線香を薫らしたるをゆゞ好く陳列し主人將監ハ糸織の小袖の上に黒七子の被風を被り机の前に座を占て目を閉して居りけり將監は頓て母子の者が座に就を覗ふて徐に其方に膝押向け「御老母にハ尋ぬる人のありて當地へお上りの由尋ぬる人は男か女か且ハ其の生年生日幷びに和御寮の履歴をも詳しく御物語り候へ夫れ承はりて占考の助けに仕らんと問ひ掛れば老婆ハ些少か席を進め「お尋に任せて愧しながら此身の素生と尋ぬる人の履歴を一通りお話し申しませう妾ハ播州高砂の者で名をゞ角屋秀と呼れ是なるハ妾の娘にて名をゞお重といふ者サテ此おぢゆうの父ハ紀州の浪人にて久保光雄といふ人今より十五年の昔武者修行の爲とやら高砂の町に參られしが不圖病氣に罹られて長々の滯留其間に甲乙多くの馴染も出來病氣全快の其後ハ近處の人々に勧められて畳ハ劔術夜ハ手習學問の指南妾の住居ハ光雄殿の滯留さゝる家の隣故衣裝の洗濯朝夕の菜の物の世話などに時々出入せし内互に意氣の相投て何日か夫婦の契を結び頓て此子を設けしかゞ二世も三世も變らじと梓の弓の末掛て樂む甲斐も仲秋の月にハ雲の障りある世の習ひとてなさけなや此子が三つの其年に國許よりして朋友の土井鹿太郎といふ人が遙々尋て見ゑられしが今度歸參の時機を得たれゞ今から直に出立して一旦歸國をせねゞならぬと足元からして鳥の立つ俄の話の旅支度歸參の叶ひし其上ハ母子共〳〵迎に寄來せゞ矢樂みに待てゐよと手當を置て出立され其後兩三度京都より尋問の書狀を寄來されしまゝなしのつぶての音信もなけれゞ如何したまとかと案じる計りわそれ紀念の此お重が脊丈の延るを貴てもの道問に今日と過ぎ昨日と送る其中に十年ばかりハ夢幻兎角田舍ハ世間狹く此子が成長するにつけ彼子の父さんハ涙人者今でハ居處も知ぬとやら何處の馬の骨か牛の骨かと口に租税の出ぬまゝに言たいまゝなる書罵紛々果ハ此子の耳にも這入て世間の讒謗の道慨けれゞ京都に居らるゝ父さんに一度逢せて下されといふその願ひの不便な計りか妾も久々にて彼人に尋逢ひ娘が成人も見せたく疎遠の怨も述たければ頃來漸々思立て娘を連ての京上り今日で早二十日餘り祇園清水智恩院の名所見物ハ佛置て毎日朝から夜に入る迄心當りの處ハもとより人の賑ふ箇所々々を親子二人が尋歩けゞ似た人にさへ見當らず今朝程相宿の去人から貴卿樣が占考の道にお上手な事を始て聞き故々尋ねて參じましたと涙ながらの長物語將監ハ熟々聞て偖ハ吾同盟の一人なる久保光雄より豫て噂に聞及ぶ母子の者ハ是なるか光雄ハ頃に無事で居る逢度う思ハゝ尋ねて行けと謂んとせしが待暫時千丈の堤も蟻の一穴より崩るゝの世の喩僅の情に絆されて頃の機密を人に漏し夫より大事を過ちなば所謂婦人の仁ならめ情なく云ふて返に如ずと早くも胸に商量を定めやがて笠竹算木を取て一封を置き暫時小首を打傾け「此封面に依て判斷を下そに和御寮が尋ねらるゝ其久保光雄殿とやらんハ最早數年前に此世を去られたれば今更何程尋ねらるゝとも迚も遯逃ふべき術なければ今ハ無縁しと斷念ゑ一日も早く故郷へ歸り追善供養を懇ろに營み給へ就ては只今お話のありし光雄殿の朋友土井鹿太郎と云ふ人物ハ吾等仔細あつて前年懇親を結びしが紀州家の家來にて然も數百石の知行を領せらるゝ立派の武士夫の朋友とあるからハ光雄殿にも紀州家の御浪人愧しからぬお家柄に相違あの

るまじ吾等が此言を切ての土産にして若久保氏の事を兎や角非難する族からば立派に辨解き仕給へと温言に慰撫むればお秀は更なりお重迄その親切を喜びの詞を述る眼ゝ涙滲る人ゝうつそみの此世になしと聞くからに依頼の網も斷果て今更力なよ竹の蹉おもげなる風情にて元來し道へと歸りけり」時烏八幡山嶮陟かはそ聲の中をゞ潛下る夜船のからゆみいと早くあゝゝ何處じやと船歌に船子の唄ふ牧方の鍵屋の濱も打過て佐太村遠く成りし頃胴の間に寐て居りし五十餘りの女の客人吃驚跳起惱中を探つて涙の聲震はし「サア大變盜人じや〳〵」乘合の衆皆さん起て下され妾が胴卷が見ならなつたといふ聲聞て同伴の十四五歳なる娘を始め乘合の人々目を覺しゾレゝ大變氣の毒やと驚ろき騒ぐその中に隣に寐てゐる二人の男は知ぬ顔なる高鼾女は二人に目を注て夫と心に了れども證據なければ詮方なく樣子を尋に出て來りし船頭某に打向ひ「今方の事といひつゝ二人の男の方へ指をさし「此方の方から手を出して妾の懷中を探る人のからるにハッと驚き目を覺せしが最早胴卷の所在知ず未時刻も立ぬ事なれば此船の中に在は必定万望取調て下されと未だ言切ぬに傍に寐てゐし二人の男ゝ一樣に俄頃勃然と身を起し矢庭に女の胸襟取り「此田舍婆々奴が吾等を指して盜賊呼ゝり烏奴如何そるか見やがれと打もかゝらん有樣なるを船頭始め乘合の人々「お腹の立も尤もながらからのながちお前さん方を盜賊といふた譯でも無し相手は何分女子のと殊に旅費を失ふた驚き紛れつひ前后の考へもなくいふた言なれば其樣な手荒なまとを成されずに能う事の分るやう云て聞せて遣て下されと左右より抑制たれど二人乃男は少しも聞ず船頭に向ひ聲荒らげ「ヤイ船頭能く聞け己等二人は大坂御町奉行の組與力弓削新左衛門樣の手先堀の内の吉五郎蔦田の儀助と

いふ者少しお調れ筋からつて京都へ出張せし歸途なるが盜賊乃惡名を附られては己等兩人の役目に關係るゝ云ふも更なり第一旦那樣のお名の汚穢此糞々と小娘ゝ此街道を働く女泥坊人に無實の罪を言掛て金を强請る奴に違ひはない己等をさる役筋の者とも知ずに無實を言掛たのが運の盡き是を幸ひに道中の惡魔拂ひ直に縛て行くのが此方の職掌サア女奴覺悟しろと腰なる十手取縄を各自に取出し身繕ひ「船頭早く船を着ろと罵り猛れど手先と聞て誰一人言を容るゝ者もなく船頭も其名に聞怖して舟子に命じ既に船を岸に着んとする折柄艙の間の方に當つて聲高く「船頭船を着るに及ばぬ急いで櫓を押せといひつゝ出來る一人の客人からり乘合の人々驚て之を見れば此人ゝ是艙の間を借切て只一人寐て居りし武夫なり年齢二十五六にて眉秀で眼涼しく色白く脊高き一個の美丈夫左手に刀を提げてズッと出たるその有樣威有て然も猛からず眼目に見ても自然凡物ならず見受けらるる吉五郎儀助の二人の手先ゝ此武夫の風裁を見て吃驚とゝ仕ながら弱味を見せず故と言に角を立「何處の御藩の御武士かゝ存せぬど御用の都合に因て岸ゑ着けさそる舟を何故からつてお止め召さると言せも果ず武夫ゝ莞爾と笑ふて物和かに「只今彼處にて承れバお手前達ゝ大坂與力の手先との事さそれば夜中々途に船を着させ此邊の庄屋年寄の睡を驚して無益の手數を掛る迄もなく最早道も些少なれば大阪迄此母子を連行き穏々お調有て然るべし若又强て此處より上陸そるとからば某些少申分からり公議の役人なればとて必賊を働ぬといふ埋もなけれバ此の老婆に疑念を掛られしを時の不祥と諦め失敬ながら老婆と某の面前にて裸体に成り懷中物并に荷物の中をも盡く改めさせ第一渠等の疑念を晴し且ゝ各方の身の明りを立し其上にて此老婆をお取調からるやうと

斷然謂れて二人ゝ閉口サア夫ゝ夫はと計り顔見合言句に詰るど心地好き」八軒家の濱ゝ昔大江岸又大江の浦とも言り夫木集に長俊朝臣が舟呼ふ聲もおよばず成にけり大江の岸のさみだれのよろと詠りしゝ此の濱の事なり豐太閤此處に城郭を築きしより京都へ上下の船出入繁く群來る旅人の絶間なければ大江岸大江浦の名ゝ昔しと成て今ゝ人家軒を併べ中にも名ゐる旅店八軒ゐるより處の名を去か呼かへたりしとか閑話休題八軒の旅店の其一軒なる京屋の奥坐敷に年猶若き一人の武士五十餘りの老婆と十四五の娘に向ひて最優しく「昨夜ゝ飛だ災難にて路用の金を失ひ異に以て氣の毒千万吉五郎儀助とか名乗し二人の手先の所業に相違ゐるまじけれど渠等ゝ當時飛鳥をも落す程の勢ゐる奥力弓削新左衛門の組下なる由後日の祟を恐れてや船頭始め舟子等が彼是と言を添て渠等を罪に落さぬやう去さりに辨護そる故强てとも言兼て殘念ながら默止せしが胴卷を失ひしから當分小遣にも事を欠くならん是ゝ些少ながら小遣にと一掬みの金を鼻紙に戴せ老婆の前に差出せば老婆は之を推返し「昨夜から種々お世話に成し上此樣な御心配に預りましてゝと左右なく受ぬを武士ゝ言をつくして强て勸れば老婆も今ゝ默止かね漸く之れを推戴き傍に置て目に涙娘と共に平伏して禮のゐりたけ述にけり却説年若き武士ゝ猶も老婆と娘を慰ゝり二人の素生を熟々聞て「然ば卿達ゝ播州高砂の出生お秀お重と云ふ母子の者尋る人の有て京都に來しに其人に尋逢ざるのみか却て死去せる由の噂を聞て力なく〳〵古郷へ歸る途中剩へ盜難に遭れしと歟實に不幸の上の不幸にて難義もさぞそと像想らる艱難相救ふゝ人間の通義なれば當地滯在中の入費ゝもとより錙國の路用迄も賄ふて進ず可れば吾等當家に滯留そる其間ゝ心おきなく此家に居給へ吾等ゝ

江州彦根藩の武士宇津木規矩之丞と申そ者當地東町奉行附の奥力大塩平八郎殿ゝ學問人に勝たる由其名世上に聞ゐたれば文學修行の爲師弟の契約を結んと這回思起して故々下坂せり同氏の許へ入門の上ゝ晝夜暇なき身となる故其以前に両三日の間を偷み吾等も此地の名所古迹を見物そる所存なれば卿等も心慰なく滯留したまへと言優しく言慰め心の限り介抱せしゝ人ゝ武士花ゝ櫻の世の喩に背ず世にも情ゐる人なるかな偖もお秀お重の母子の者ゝ不測の難を救われし剩へかゝる情を受しかば其喜び何に喩んかたもなく規矩之丞をゞ神佛の如く尊敬み一日二日と此家に滯留して住吉天王寺天滿大神などゐらゆる神社佛閣に參詣の歩みを運びをりしが母のお秀が宇津木の恩を感ずる夫よりも娘お重ゝ本年十五やゝ春情つく頃なれば規矩之丞が性質より容貌迄世に優れたる色も香も有標致に人知ず想を懸女子と產れし甲斐に

はかゝる厳子を夫に持てあそと心に深く思占母のお秀の目を忍び起居につけてひらさもの心の程をはのめかせど宇津木ハ文武の二道にのみ心を潜めて更に他意なければ少しも感ずる氣色なさにぞ終に心に忍かねて一日規矩之烝に向ひ思ひの丈を岩間行く山下水の漏らしそめしが規矩之烝は之を聞て言を改ため卿の志ハ嬉しけれど前にも云ふ如く吾等ハ文武修行中の身の上吾志の成らぬ中ハ決して女子に肌觸しと弓矢八幡に盟ひたれば此事計りはいなみの、いなと答を爲そより道なし人の情を仇にする玉の盃底なし男と必ず怨み給ふ可らず只夫計りが卿と吾とよしや意氣の相投とも互に親のゐる身なるに許しを得ざれバ心に任せず親の許しを待ずして野合の契りを密に結び卿の生涯を誤らそ如き不義の行ひは決して爲さじされバ卿も無き緣と諦めて此後明白に母の許を受然る可き緣しを求めて身を任せ給へなど懇に慰諭め只兎角の返答もなく頭のみ打掉て頻に泣入るお重の背を幾度となく撫さそり殆ど持餘して居折柄母のお秀は風呂を揚來て圖ず側聽なし娘の痴情を憐み規矩之烝が志操を感じ久保光雄と情を通はしたる吾身の昔さへ紀得て今しも絞し手ぬぐひを又も涙に沾せしが規矩之烝の倒惑を見に見兼つゝ頓故と高く咳きして其席に入り程好く二人が中を引分しが此て猶此家に滯留なさば愈娘の思ひを增さそる道理とても適ふべくもゐらぬ緣しの爲に徒に物思ひをさそるも不便なり夫よりハ片時も早く爰を立去り斷念そるが中々に親の慈悲ならめ去者ハ日に疎しとか云世の諺も有ものを未年行ぬ身なれば思ふも頻に又忘るゝも早からんと心一つに分別して其夜規矩之烝に向ひ是迄の恩惠を厚く謝し今更國へ歸るも誰待人も無き身なれば尋る人の若此世に在らば武運長久の祈禱且ハ一日も早く再會そるやうの願ひ又愈此世に無きならば菩提を吊ふ爲め是より親子三十三所觀音の靈場を順拜せん覺悟就てハ最早お庇蔭を以て當地の名所を殘りなく見物したればお名殘惜しさハ山々ながら明日ハつとめて當所を出立そべく思ひ侍ると夫とは無しに暇を告れば宇津木ハお重が痴情を避るにハ至極の都合とハ思へども又今更に不便の念の彌增しつゝ路用の手當として又も幾計の黄金を送りければお秀は感涙更に止めがたく明て夫とは岩杜鵑花言ねばさそゐれ白波の名殘惜しさに水鳥の立もかねつゝ朝鳥のなきのみなきてひづかるお重をさそそと思へど互の爲と弱る心を勵して威しつ賺しつ説諭め翌朝の未明さ先第一番なる那智の御山より願禮せんとゐさもよし紀路を指して立出けり

第五回

天滿與力町の與力大塩平八郎の玄關に案内を請ふたる一人の武士取次の若黨に向て慇懃に拙者は江州彦根藩宇津木規矩之烝と申ス者當先生の大名を慕ひ文學の指南を願ひ度く故々推參仕りぬ右宜敷くお取次を願ふと云ふ若黨ハ此と聞て主人の居間に至り云々と言出しが今日は經書の講釋日にて只今講議を終りし處なるが平八郎ハ養子格之助門人瀬田濟之助小泉淵次郎吉見九郎右衛門渡邊良右衛門近藤梶五郎庄司儀左衛門大井正一郎西村利三郎などを始め多くの門弟を坐の左右に居併ばせ文事あるものは必らず武備ゐりと孔子も曰ひたる如く文學武藝は車の両輪若し一方を欠く時ハ或ひハ疎暴に陷り或ひハ柔弱に流るゝの弊ありて共に其効用を爲さゞれば吾等も幼年より學問の餘力に武藝を嗜み就中左振流の鎗は免許をも得たるが各方も定めて各自得意の藝あらん爾後ハ講釋日毎に講釋の終り〳〵後武藝の試合を爲し治に居て亂を忘れぬ爲め互ひに筋骨を固めてハ如何と物語てゐる折柄なり若黨の言を聞くより門弟の中の一

人なる彦根浪人梅田源左衛門が些少席を進めて平八郎に向ひ先生其規矩之烝と申せゝ彦根に同姓多くゐる中にも大宇津木と云ゝれ三千五百石を領そる宇津木下総の子息先生が只今の御物語に能く適ひて年ゝ未だ若けれども學問武藝両ら人に優れ殊に槍術ゝ寶源院流の奥義を極め一番にて屈指の上手にて候ふと言出れゝ平八郎ゝ莞爾と笑ひ夫れまそ誠に奇妙なれさる武邊者の入門ゐりしを幸ひ只今申したる武藝の試合を今日より行ふべしと頓て規矩之烝を居間に通し初對面の挨拶を爲し門弟中にも夫々口誼を述さそるが否や平八郎は規矩之烝に向ひて言を改め文事ゐる者は武備ゐりの聖語に基き本日より講學の餘力武藝の試合を做せ都合然るに只今梅田より承れば貴殿は鉛術の名人なる由吾等も此道を好めゝ先第一番に貴殿と吾等と一槍を試み候はん卒お仕度召れよと言ふに宇津木は恐入未熟の技をお聞に達せしさへゐるを況て先生とお手合せなぞとは愈以恐縮至極此儀計りゝと强て辭退それぞ大塩更に聞入す謙遜も事にはそ依れ卒々と勸めて止ざれば規矩之烝も今は否み兼手拭取て向ふ鉢巻襷十字に綾取て袴の股立高く取る平八郎も同く行粧を整へ各自稽古槍を携へて奮しく前栽へ飛下れは門弟中は名に負ふ上手と上手の試合定て目覺しき見物ならんと堅唾を飲で扣へたり此て両人ゝ前栽の中央に突立上り大塩は槍を上段に擇へ宇津木は槍を下段に擇へたる有様一人は龍の雲に乘る勢ゐり一人は虎の蜿を負ふの形ゐりや、暫時互ひに白眼合ふて居りしが頓て大塩は宇津木の体に隙あるをや見出しけん大喝一聲突出そ槍を宇津木は十文字にてガッシト受止め一跳はねて槍操返しエイと聲掛け突掛るを大塩ゝハッシと拂ちひ是より両人互に秘術を盡し一上一下虚々實々法を鬪し術を競ふる事凡そ半時餘遂に勝負を判たざれゝ互に槍を引て圏の外へ引退き平八郎は規矩之烝が若年にしてかゝる手練ゐるを口を極て賞賛し宇津木ゝ大塩が學問の餘力かく武術にさへ秀たるを心に感じ愈其英傑なるに服しけり此て諸門弟ゝ之に續て種々武藝を角べ互に勝負を爭ひしが頓て薄暮に及びければ今日は是迄なりと各本の席に復し夫より酒宴に時を移しぬ」偖も宇津木規矩之烝ゝ大塩と師弟の約を結び其後ゝ内弟子同様該家に寄宿なしゐらゆる經史を通覽して解し難き件々を質問し又時にゝ師説に隨ひて静坐默思陽明が良知良能の理を窮るなぞ只管學事に身を委ねてをりしが平八郎ゝ規矩之烝が若年にゝ稀なる才器殊に門閥家の子息なれゞ格別叮嚀に待遇ひさながら吾子の思ひにて心の限り教導くにぞ規矩之烝も亦其恩に感じ恰も父の如く尊敬ひけり抑々平八郎ゝ今更記そも事古りたれど儒學軍學武藝驍も其蘊奥を極めたるのみならず氣性活潑品行方正義を見て勇み事に臨で果斷慮に出てゝ良吏家に在てゝ好夫子實に當世第一流の人物なるが只疳癪の一僻ゐりて自ら之を抑ふる事能ず家人僅に過失ゐれゞ罵詈叱咤甚しきゝ打擲を加る事なぞゐり一日の事になん下婢のおゆさ(十九)が臺十能にて火を運ぶとて誤つて取落し平八郎が平生秘藏せる唐本にて一帙價五十両にも餘る者を數卷焦せしを平八郎ゝ例の疳癖にて大ひに立腹し如何よ謝れども更に聞入す散々に叱責せし末遂に夫が親許なる天滿龍田町の播磨屋利兵衛方へぞ遂返しける規矩之烝ゝ之を見聞して大塩が平素に似合ゝざる短慮の振舞を甚く心に憂ひ其夜大塩が讀書せる几案の前に恭座り最恐懼なる申言にゝ候へども小生先生に向つて一言御諫言申し度事ゐり若蕪辭を弄られず御採用下さらゞ大慶此上なし若又御採用下されずゞ夫迄の事今夕只今より師弟の約を解き直に歸國仕らんのみと思入たる顔色にて言出

けり平八郎も流石の人物なれば面を和げて席を進め一旦師弟の約を結ぶからは互に忠告して其足らざるを補ふぞ本意なれ心おきなく仰聞けられ候へ謹で承らんと云ふ其顔を熟々と打詠め御忠告申上げたき義といふ他に非ず先生が短慮狂癖の一事なり小生如き黄口の竪子が先生に向つてかゝる事を申上るは釋迦に説法とやらんの喩に似て最烏許がましき事の限りには候へども先生には學問を以て數百の弟子の師範たるのみか其職掌を謂へば大阪府民數十万人の生殺を司るともいふべき大役を負ふ御身なれば手を動し足を擧るにも深く心を用ひ給ふ可きに動もすれば癇癖を起し短慮の御擧動あるぞと數次なり既に今日もおゆきの過失を怒り給ひて幾度か打擲を加へられし上剰へ家許へ逐返されしが假令何程大切なる書籍にもせよ人身の貴重なるぞ何れぞや若彼が身に疵傷け給へば如何に仕給ふ御心得なるか短慮を以て事を誤りし者義仲信長など例を引迄もなく先生には飽迄諸じ給ふ事なるに此一餅のみ平生に似氣なきは白璧の微瑕とや申さん實に先生の爲に惜むとまろなれば心におきかねて失敬を憚ず此くは一言を呈し候ふなり若小生が微衷を憐み給へ爾后短慮の一餅のみを慎み給へと涙ながらに言出けるが平八郎も之を聞て坐に感涙に咽び多の弟子あるその中にかゝる忠告を給るは貴殿一人のみ以來貴殿の言に隨ひ短慮の餅を改むべければ此後共に心附れし事あらば遠慮なく仰聞られ下されよと快く承諾ければ規矩之烝は其言甲斐あるを喜び只管無禮を謝にける」

天滿竜田町なる播磨屋利兵衛へ女房おみつと諸共に物思はしき風情にて娘おゆきに打向ひ「喃おゆき今更云ふも取り返しの成らぬ事ながら大變な事を仕出かしてくれたなう其方も能う知て居やる通り彼の大盥の旦那様は平生御慈悲深い其代り一つ物が間違ふとお六つかしく誰が何とお詫を仕ても中々お聞入のないは例ものゝあと就中今度の過失は旦那様が第一の御秘藏價五拾両もする書籍を燒た事なれば迚も普通のお詫で事のそむ譯ではなく其代物を償ひたいにも何分大枚な金高其日暮しの吾等の力に中々及ぶ事でいなしさうかと云ふて此儘に仕て捨置く時には數代お出入の旦那先殊におみつは幼少い時から先旦那様の御傍に御奉公申し吾家へ嫁に來たのも先旦那様の御媒妁格別深い御恩のあるお家數を失錯らねば成ず若も失錯た其日には夫婦が旦那にそまぬ計りか御先祖代々へ申分けのない始末コリヤ何と仕て好からうやらと両手を組で目に涙おゆきは父の述懐を熟々聞てチロ〳〵壁「此妾の過失から數代お出入の旦那先殊に母様の嵜のお主様を失錯らせては御両親に不孝な計りか御先祖様に對してもそみませぬ故万望此身を何處の廓へなりとも沈めて五十両の金を調へ御書

籍の代をバ償ふて相變らずお出入のなるように仕て下されと疊に平伏そおゆきゞ脊中をおみつは片手に撫摩「コレおみつ其方は何を謂るやら其方に其樣な悲しい勤をさそる程ならば父さんも此の母も始めより苦勞はせぬ殊に妾ハ其方の爲にハ義理ゐる中假令其方に何樣な過失がゐればとて其樣な事をさせてはおとく樣(先妻の名)へそまぬ計りか世間の人への義理も立ねば此金ハ此母が如何な心配を仕てなりとも必ず調へてやる程ゑ其樣な心勞はせぬが好いといふを聞くより頭を擡げおみつの顔を怨めしげにおゆきハ詠めて膝摺筍「ソリヤ阿嬢さん水臭い假令成さない中ゑもせよ二つの時から養育られたお前が妾の眞の嬢さん義理も世間も入らぬ程に妾を賣て其金をといふを利兵衛は打消して「最う〳〵云ふてくれなおゆさの過失より起つた事とは云ひながら此私に甲斐性がゐつたなら其樣な苦勞もさせまいもの到底働さのない亭主や親を持たのが其方達の不幸といふもの四百四病の其中ゑ貧程辛いものハないと能く世の人のいふ事なれゞ眞ゑ金ハ此身の敵五拾兩の金さへゐれバ立派に主人へ辨解も立ち其方達にも此樣な憂目ハ決して見せまい者と落る涙の滴か雨か軒におとづる村時雨定めなき世をかゑつ身のしをる、袖を又沾し親ハ泣寄泣による母子と見ゆる二人の婦人此家の戸口を突と這入り「ハイ兄樣も姉樣もお内かな磐田のおとく(四十利兵衛の弟河内國磐田村百姓清六の女房)がおうめ(十七)を連て參じましたといふ壁聞て利兵衛夫婦はヤレ懐かしやと出迎へヤガテ二人を一室へ通し互に久濶の挨拶を終るが否や利兵衛はおとくに打向ひ「おとくゞの清六ハ壯健でをりまそか近來ハ當地へ馬を逐て來ぬかしてとんと内へも立寄らぬが別に変つた事もゐりまそまいのうおうめも見違る程脊丈が延びて然も容姿も大層美しう成た是でハ最う何日何時養子を貰はふとまゝしゃ先年初天神へ參詣に連て來た時は未だ確か髮も結ふて無つたと思ふたに小兒の成育ハ早いものと謂れておとくは涙ぐみ「其脊丈の延た子を賣ねば成ぬ理がゐつて今日は故々出て參じましたと聞より利兵衛ハ女房おみつと思ハず顔を見合て「可愛想に何で此子を賣るのじや清六さへ働いて居たならば別に難義な事もゐるまいがなといへばおとくハ嗚咽りゐげ「ハイ其清六どのに難義な事が出來ましたわいなと其儘其處へ泣臥そを利兵衛は倚も膝摺寄「おとく殿さう泣て計りゐてハ理が聞ゐぬ變つた事とハ何如した始末万一清六ハ頓死でも仕ましたかと少し遠込で尋ればおとくハ涙の顔を上げ其理といふハ此ら仕た事と是より語出そ其始末は清六が家居なそ磐田村に薩州侯の轡鍛治藤右衛門と云ふ者ゐり村にて有名の豪富なるが一夜盗賊忍入て藤右衛門夫婦と家内の男女四五人を殺害し多くの金錢を奪ひて逃去りしかば其村の破落戸に疑ひかゝりて片端より上げられ嚴しき詮議ゐりけり却説清六ハ藤右衛門方へ賊の這入たる其翌朝例乃如く馬を追ふて道明寺の方へ行しが村稍壺にて売の財布を拾歸り駄賃を入るに勝手好れば其儘に仕て所持してそりしが其財布は前夜藤右衛門の方にて賊の盗去りたる物なりしかば夫より疑ひかゝりて大坂より出張の長吏堺の内乃吉五郎に縛められしが吉五郎は其財布を證據に取て一應の吟味もなく當人并に妻子の辨解ハ更なり村役人を始め近隣の甲乙が清六に限り決して左樣な不屈を働く者には候はずと樣々に陳謝それも更に聞入れず既に大坂の本牢へ引上げになるべき樣子なればおとくはもとより近處の甲乙も大に驚き猶も吉五郎に縋りて只管歎願せしが吉五郎ハ之を聞て左迄に云ふならば五十兩の金を都合せよ然ば清六の罪を免して遣ると言出しにぞおとくハ何とかして

其金を都合せんものと彼是心配せしが馬追風情の身上にて迚も才覚の目的なく切迫に詰ッて思附たる娘おうめの身賣是を利兵衛に相談そる時ハお梅の身賣を止るのみさりとて好思案のハるべき道理なけれバ寧瞬思つて此うと心一つに分別を定め村の某より書狀を附て貰ひ新町の判人の宅へ行てお梅を見せ身賣の世話を頼みしに此子の容貌ならば年一杯百両迄ば屹度貸して進せるが親類の受判がなければ相談は出來ぬとの事故其事を頼みに來りしなり此ておとくハ右の始末を詳しく話し情願受判をと言出せば利兵衛ハ同じく涙ぐみ親は泣寄とやら世には不測に似た事もハるれバハるもの此方にも據ろない義理が有て實は今夫婦がおゆきを賣る賣らぬの相談を仕て居る處と半分聞ておとくハ吃驚思ハずエーと利兵衛の顔詠めて呆る、其顔と利兵衛も同く打詠め「おとくどの私ハお前に折入てお頼み申度い事がハるが何と聞てハ下さるまいかといひつゝ一遍鼻打かみ「サテおとくどの清六とハ理が違ひ義理ハる中のお前に向ふてハ誠に云ひにくい事なれどお前の方で入用の金も五十両私の方で入用の金も五十両處が今の話の都合ではお梅の容貌の美艶しいので年一杯百両の身の代を親方が貸そとやら幸ひ其百両を借受て私の方へ半金の五十両を融通してハくれまいかと此う云ふたらば世にも無慈悲な小父御現在の弟が無實の罪に陥り其難義を救ふ爲に只一人の姪が苦界に身を沈る果敢ない始末少しでも人らしい心がハらば無い袖を振てなと成丈の金の才覚を仕てくるゝのが當然夫に何ぞや姪が身賣の身の代を半分貸せとハ人面獣心ハまりに聞ハぬ云ひ方と只一口に言消さるゝハ知れた事なれど是にハ段々道理のハれバマア氣を靜めて私の云ふ事をトックリと聞てくだされ私の方で金の入る仔細といふハ是爰にハる娘お雪が過失より起つた事

五十両の金を才覚して其過失を償はねば身にも家にも代がたない大事の旦那を失錯じらねば成ぬ切ない場元々妾の過失から起つた事なれば妾の身を泥水とやらに沈め其身の代にて償ふてと娘が達ての願ひなれど處が爰に悲しい話といふはおぬしも知て云やる通りおみつと娘とハ成さぬ中故假令どのやうな事がハつても死だおとくと世間の義理に對して其樣な事はさせられぬとおみつが苦情を云ふ計りかと云ひつゝおゆきの顔を横目で見て水鼻を啜りハげ見た通りの娘が容貌目鼻なり口元なり世間普通に生附けれど不便や疱瘡の神に憎まれ痘痕を殘した其上に地腫もひかねば年一盃賣た處が金には成らずさりとて知ての活計なれば外に金ハしらゆる術計もなく實ハ思案にくれたる處爰の道理を聞分て次手といふも異なものなれどおうめに頼むで五年の年期を情願十年に引延し此場の難儀を救ふてくだされさそれバ明日か

ら此の私も家業に一入精を出し少づゝなと金をば儲へ一年二年の其内にゝ其五十両ゝ償ひまそると拜む其手をお雪ゝ引分け「アノ父さんの何謂と妾の過失から出來た事をお梅さんの身の代とやらで償ふて貰ふてゝ人間の道が立ませぬ自分に否と思ふ事は他人にさそなと大塩の旦那様が例も御門弟方への御教喩妾が苦界の勤めを悲ふ思もおうめさんが悲ふ思ふも孰れにおろかゝ居るまいに如何して其様な事が出來ましやう假令妾の身が魂婦にもせよ年一杯を年二杯にも三杯にも引延し一生涯なりとも身を沈めて無理にも百両の身の代を貸て貰ひ情願其金を半分小父さんの方へ用立て無實の罪とやらを救ふて上てくだされと云ふをお梅は打消して「イヱ〳〵お雪さん夫は入らぬ義理立といふもの到底妾は賣られる覺悟で既に判人とやらに目見仕迄仕て來たもの五年勤るも十年勤るも汚そ身体に厭ひゝのりません又其れ計りか現在吾親の爲に入る金を假令從姉妹同士の中にもせよ他の娘に身を賣せてドウ安閑としてゐられませう不孝者と謂れて親の内に居るよりゝ孝行者と謂れて廓の勤をそる方が妾しや何程か嬉しふ思ひ升と云へどお雪ゝ聞入れず尚も兎や角言んとそるをおとくゝヤ〻と押止め利兵衛に向ひて涙を拭ひ「先刻お前様が娘を身賣の金を半分貸てくれと言出された時ゝなのまり不人情な事を云ふお人じやと思ふたが段々の理を聞て見れば如何にも御尤又お雪の優しい志お梅の孝心厚い言を聞て見れば愈々心の迷ひの醒めお梅を年一盃賣て此度半金五十両御用立申しませうと云れて利兵衛ゝ手を合せ「ヱ〻忝じけないそんなら私の無理を聞て五十両用立て〻下さるかと云ふ其言の尾に就いておみつも共に伏拜み「おとくさんなのまりお氣の毒でお禮の申しやうも御坐りませんと嬉し涙に咽ぶ折柄表ての方に聲高く「ハイ御免なさい播磨屋利兵衛さんのお内ゝ此方でそか私しゝ新町の判人茂助と云ふ者でそが此方に摂田村のおとくさんゝお出で、御座り升か

第六回

平八郎ゝ文机に向ひたる膝を斜に其方に押向け坐敷の隅に平伏して居る利兵衛に向ひ「只今取次の者より承れば先日おゆきが誤つて蒸したる書籍の代價を償ゝんと五十両の金を持参せる由其志ゝ感心なれど吾等の在意とゝ大ひに反對なり彼書籍ゝ如何にも世に稀なる品なれば一時ゝ立腹の餘り嚴さ折檻も加へたれど其本意を言ば渠ゝ一季半季の奉公人とゝ理が違ひ數代出入の其方の娘殊に母おみつゝ吾家に奉公して居りしものなれば平生吾子のやうに思ひを處より後來の懲めにもと渠が爲を思ふてせし事なれば其方に限らず誰にても一應の謝にさへ來るなら夫を機會に歸參を許して遣らんと思ひをりしに代金を持て謝に來るとゝなのまり正直過た仕方シテ其五十両の金ゝ如何して都合致せしぞ平素聞及ぶ其方の手許にてゝ迚も是丈の金を持合と道理なし其方も知つたる吾等の職掌其金の都合の仕方に依てゝ歸參を許しどうても許されぬ場合もなれば包ます仔細を語れよと物和らかに問掛られ利兵衛ゝ持し手巾にて目を押拭ひて鼻つまらせ「旦那様のお察しの通り此金の才覺をそるに就てゝ誠にお愧しい次第が御座り升が折角のお尋故有体にお話し申しまそと是より書籍の代金に手支へお雪が身賣をそるせぬの話半へ弟清六の女房おとくが真人清六が無實の罪を救ふに五十両の金入用の爲娘お梅を新町の廓へ賣んとて其受判を頼みに來りしを幸ひお梅を年一杯に賣せて百両の金を調へ半金五十両を融通して貰ひ漸く持参せりと有葉有枝に物語ば平八郎ゝ之を聞て心の中に是迄長吏塀の内の吉五郎が職掌を笠に着て不法の行ひな

る由度々耳に入りしが無實の罪人を苛刻の取扱ひをするさへゐるに金を以て其罪を購はそるとは不屆千万最早此上用捨は成らじ片時も早く渠を引上民の患ひを除いてくれんと其事をのみ思詰て利兵衛の話は上の空兩手を組で思案の体利兵衛は此とも氣の附かねば猶かにかくと切なき事情を述たれども平八郎い默然と有無の反答もゐらざれゞ果い些少か不審を抱き「若旦那樣由ない一家の苦情話さもしい事をお聞に入てお氣に障ましたならゞ眞平御用捨若旦那樣々々々と言れて平八郎始て心附態とさゐらぬ風情にて「イヤ氣に障へる處でいない左程切ない工面をしても書籍の代金を調へて娘の過を償ひたいとい例ながら正直なる心底平八郎如何にも過分に存ずる然し前にも申せし通り始めより代償を償いせんとてせし折柢ならねば此金子は一刻も早く新町の亡八が許へ持參なしお梅とやらいふ孝女の身の代の半金を償ふて十年の年期を五年に縮めてやるやう若先方にて彼是苦情を申さゞ平八郎が添狀にても仕てやらん又お雪は過失て敗るに何憚のゐるべきぞ其方家に歸次第直に送りあそやうにと最慈愛ゐる其詞に利兵衛い夢かと打喜び「故々持參せし過料金を此儘持歸るい不本意なれぞ折角のお慈悲を背くも却て恐多ければお詞に從ひておとく親子を喜ばせまそる又お雪めい私が歸次第直に遣いしまそる程に此上共何分御教訓をと云ひつゝ金をば懷中に頼を壓に低頭平身喜勇んで歸行く」却說墨田村清六の娘お梅い父清六の爲に新町の廓に身を沈め冬の內い見習ひとて遣手又い姉娼妓の某に從ふて莚席の周旋閨房の秘術何呉となく傳授を受け其翌年文政十年正月元日より新町の倉橋屋より己が名の一字をそのまゝ梅の戸といふ名にて突出しの轉進に出しか片田舎にあそ成長たれ其容色の美麗さあと己が名に呼ぶ梅の花の色香溢るゝばかりなるのみか渠い親孝行の爲に身を賣れたる者なりといふの芳き名の春風に吹傳へられ四方八方に聞きしかが突出しの其日より谷の鶯夫ならで色をとめ香を慕ひて吾あそ花の眞意を知らめと群集ひくる客人横堀川の水の蜜夜絶間なき中に就中歩を繁く通ひくるは越後町の堺屋といふ青樓の客人にて淀屋橋の南詰越前屋といふ宿屋を定宿とせる河內國富田林の材木商和泉屋吉兵衛と云ふ人なり年齡は三十一二色淺黑く背高く眞高く目冷じく青髭多くゐりて例の雛男にはゐらねど又た是一個の好男子なるが大坂京都兵庫等へ手廣く材木を賣捌く由にて金錢を湯水の如く使捨然も極て慈愛ゐる性質なれば梅の戸は其標致と情愛に絆されて色をも香をも知る人ぞ知るといかゝる人の事にあそと深くも思染め君ならで雛にか見せんと村肝の心の限り待遇しつゝ妾が在所い卿が家居仕給ふ富田林にい遠くもあらぬ墨田村の白姓の娘にて云々と憐れなる身の上を細々と明し行末の事までも打頼みしがもとより義氣ある吉兵衛なれば愈々不便の心增して夜晝となく通詰素人の新夫嬶にも倘いや增るまで鴛鴦の契りを交しける愛に又同く此廓へ忍びて通ひくる一人の大盡あり字を三日月又い月末の君とも唱へ常に全盛の遊びを事とせるが倉橋屋の突出し梅の戸の聲價を聞て孫て行附けなる明石屋といふ青樓より口を掛けしが差支ありとて減多に招きゞ應せず偶出來れゞ先約あれゞとて坐敷のみ勤めて情なく歸去りいかに心をつくせども帶紐解ねば果は心に怒りを含み例も己が頃使に連るゝ幇間の甲乙を犬に使ひて梅の戸の樣子を探らせしに堺屋の客人にて富田林の材木商吉兵衛といふ深間の客ありと云事の分りけれゞ渠あそ世にいふ妻敵にひとしき者なれば何日か機を覗ひて耻辱を與へ此遺恨を晴してくれんものと密に其事に心を苦しめ兎さ

主此うさま思案をつひやしけり

今日なん彌生中の五日とて何處も花の盛り奇るがわきて中野村なる櫻野祠のわたりゝ櫻野の名に背ず淀川の両岸に植併べたる數千株の櫻今を盛りと咲亂れ雲か雪かと見紛ふばかりなるが流るゝ水の面に移る景色若唐人をしてこれを寫さしめば數里の長堤櫻花彌望淡々濃々雲晴く雪凝るとしも記そべく思われて東都に其名聞ゆたる墨田川原の春景色も愛にゝ如何で

と想像らる然れば大坂に住る人貴賤雅俗の差別なく舟に歩に此處に群集ひ來て花見の莚を開けば其雜沓いゝん方なく交に那材木商和泉屋吉兵衛ゝ心知りの手代五兵衛一人を伴に連れ歩よりして此堤に來り花と觀花の人を詠めて其景色の美艶しさと群集の雜沓に目を驚し流石名に負ふ都會の地ゝ又格別なものなりなど物語ひつゝ樋の口の方へ行んと源八の渡場迄來りし折しも向ひの方より博徒と覺しき五六名の若者孰も酒を過せしものか顔ゝさながら猿の如く雙脚も蹣跚にて來かゝりしかばスハ惡者の來りしぞ間違のおさ中道を避けよと吉兵衛の指圖に五兵衛ゝ承諾はりぬとそのまゝ左りに除る間もおく櫻の大朶に五升入の空樽を結着て引かたげ眞先に進みたる一人の若者故と五兵衛に衝突り「ウヌ鈍盲漢人に衝突つて一言の謝辭も言ぬゝ不屈奴だといふより早く打て掛るを吉兵衛ゝ夫と見より中へ這入り「從者の不調法ゝ主人の不調法万望吾等に免じて御

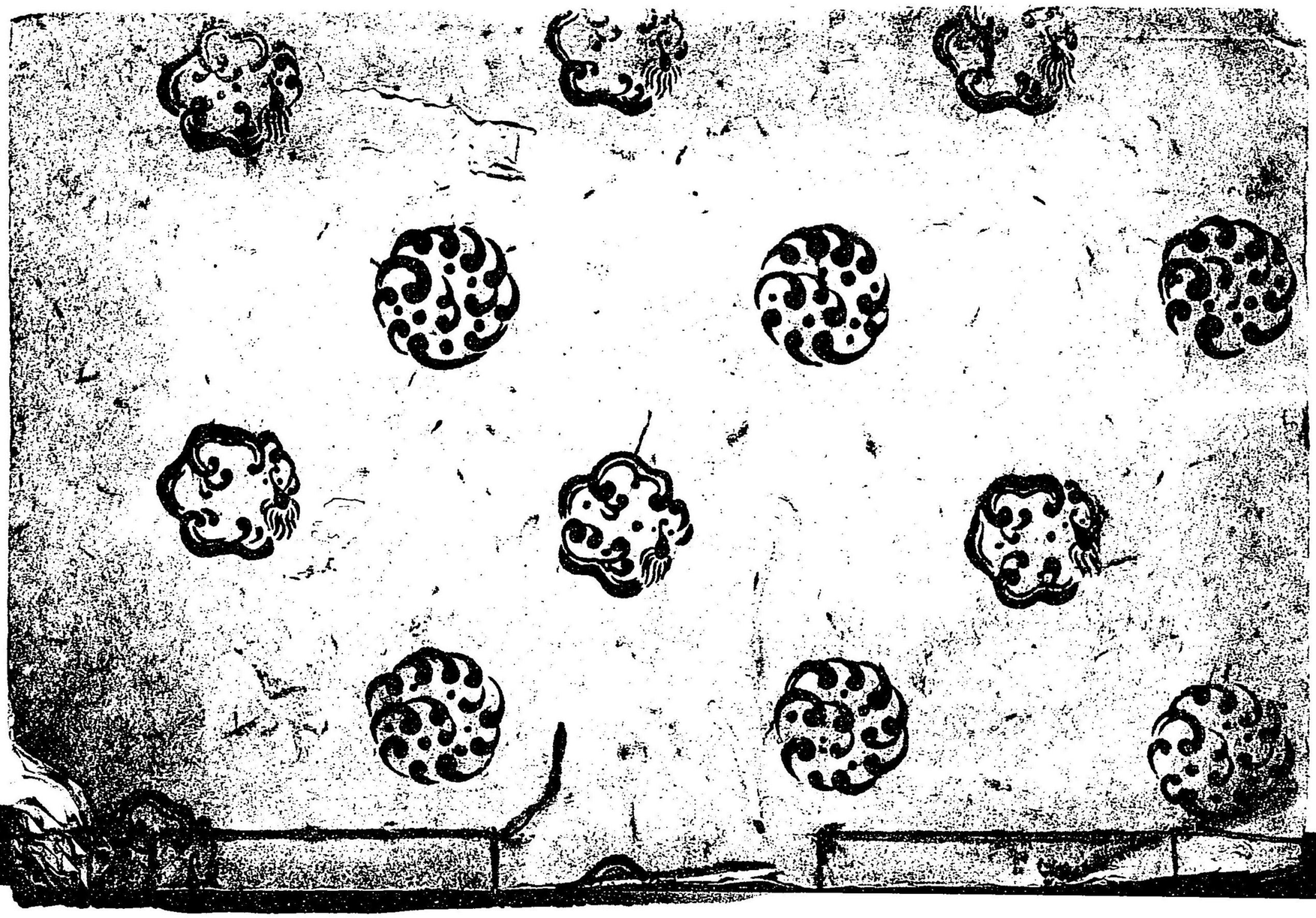
用捨あるやうと両手を下て詫入れども博徒等ゝ少も聞入ず「ナニ從者の不調法ゝ主人の不調法だと爾うぬかそからゝ手前が指令をして其奴に衝突せたに違ひねへ御用捨も糞も入るものか其奴も一所に延して仕舞へと無法にも吉兵衛目掛て打てかゝるに氣早の五兵衛今ゝしも耐兼先に進み一人の利手をかついで素頓倒河原の砂地へ打附け續いてかゝる二三人を手足を利せで投附けゝれば思ひの外に手強い奴子め迚も素手でゝ適ゝぬ故其處等の茶店で眞木雜棒をと口々に罵りて堤の上へと馳去けり此時傍の岸に繫ぎたる一艘の家形船より顯出たる一人の客人年齢四十二三黒縮緬の衣裝に黒縮緬の羽織舟の舳先に立上り屋根に其身を打凭せて片手に楊枝を使ひつゝ先刻か五兵衛の擧動に目を着てをりしが今惡者共が堤の上に馳上り主從ゝ迹見送て突立たるを見るより心に打點頭「若其處か二人の衆町人に稀なる只今のお働

さ何如にも感心至極然しながら世の喩に云ふ乞丐に棒打此上仲間を語ひて猶旧冊の怨を仇をせんも圖られねば塚原卜傳が無手勝流の極意いざ此舟に乘て渠等が再擧の暴威を避け給へ早く〳〵と聲を掛られ吉兵衛い元來渠等と力を競ぶる心なければ頓て其舟に走近附き「何處のお方か知ねども御親切なる只今の仰せ眞に危急の場合に候へば失敬ながらお言にあまへて暫時お船を拜借せんと五兵衛引連乘移れば彼人い最叮嚀に「由なき事にてサヅ御心配イザ一献と主從に杯を指し渠等の重て來らんも五月蠅ければ少も早く處を轉んとやがて船頭に命令て棹を下させ船を下手へ下しけり

三津の白浪上の巻終

明治十五年十二月十五日御届
仝　仝月廿一日出版
定價金十五錢
大坂府平民
編輯兼出版人　林市平
府下北區中ノ島五丁目十七番地
大坂東區本町四丁目
發兌　岡島真七
仝浪華橋南畔
印刷　龍雲舍

○三津の白浪上中の巻
右来春早〻發賣升るを乞ふ御愛讀給えらんことを望む
發兌書肆白

賣捌所

大坂北久寶寺町　華本文昌堂
同　心齋橋筋　北尾新聞舗
同　唐物町　うさぎや支店
同　堂島中壹丁目　靜雲堂
同　堂島中町　畑中吉兵衛
同　天滿天神鳥居内　野口清兵衛
同　心齋橋鹽町　綿ふぢ政喜
仝　
同　平野町淀屋橋　石川和助
同　平野町御靈前　桔梗屋
同　日本橋南詰東　本安
同　新町通町　八百善
同　松屋町筋糸屋町　京吉
同　本町八百屋町角　木村松之助
同　ばくろ町中橋東ヱ入　三平堂
同　梅田ステーション　小間物店福田社
東京神田區裏神保丁　鶴聞
西京寺町御池下ル　駿々堂
西京佛光寺烏丸東ヱ入　東枝甚兵衛
仝　四條西石下ル　上田仙吉
神戸北長狹通七丁目　弘舎
仝　相生橋　日讀堂
攝州西之宮新聞舗　宮助
泉州堺吾妻橋通　集舎郎
仝　岸和田北町　本郎
紀州和歌山本町貳丁目　平助
仝　御堂前北町　津郎
大津上京町　澤平
江州彦根西内大工町　田堂
播州姫路俵町　山郎
仝　伊藤平郎
但馬豐岡寄田町　野助
伊豫松山湊町四丁目　中郎
仝　仝　三丁目　田井郎
長崎酒屋町　井
大坂高津表門鳥居内　小牧熊太郎　中井利兵衛　藤新二郎　安和長七郎　新一源次郎　廣文庄兵衛　弘新次郎　向井二郎　玉井七郎　由田二郎　伊藤利兵衛